

べらんめい 俺が勝海舟でいい



取材・文・構成 © 三澤敏博(絡緑堂)

みさわとしひろ デザイン・イラスト制作を生業とするかたわら、見つけた銅像は三六〇度写真に収めるというコンセプトのもと、日々幕末スボットに繰り出してはコレクションを続ける。その幕末好きが高じて、ついにはオリジナルの幕末グッズを制作し販売もしている。オリジナル幕末グッズサイト「伊呂波堂」 <http://irohado.ocnk.net/>

「江戸城無血開城」のエピソードや坂本龍馬の師匠などとしても有名な勝海舟は、両国に生まれたチャキチャキの江戸っ子である。べらんめい調で幕末の難局を渡り歩く海舟の姿は、実に小気味よく痛快

なものがある。実は海舟の父・小吉もたいそう豪快で破天荒な人物であつたらしい。喧嘩では右に出る者無しと言われる程の腕っぷしで、道場破りなどをしながら日々過ごし、挙げ句には子孫が決して自分のようにならない為にと、その半生を「夢酔独言」という本に書き残して死んでいったという。そんな父に育てられた海舟

が豪快な性格になったのは当然といえは当然であらう。



そんな親子の関係を表すエピソードの一つ。それは海舟が九歳の頃、犬に牽丸つまり金玉を片方、噛みちぎられて瀕死状態となる事件があつた。父・小吉はこれは一大事だと、近所の「能勢妙見堂(墨田区本所)」に通い、水垢離をして息子の回復を神頼みをした。しかしそのやり方たるや、まさに喧嘩ごしの祈祷であつた。小吉は妙見菩薩に「お前が本物なら息子を直して証明してみろ。」と凄み、さらに「もしもこのまま息子が死んだら、俺があのお世に行つた際、諸神諸仏に妙見菩薩はイカサマだとぶちまけるが、どうなんだい妙見様!」とおどしあげたという。そのおかげか海舟の病状は回復し、妙見様も一安心といったところであつた。現在、妙見堂はこのエピソードに由来して、勝海舟の胸像が建っている。ちなみに小吉も昔、野宿をしていた時に崖から落ちて金玉を片方潰している。息子の痛みが、まさに痛いほど分かつたのであらう。

その後、海舟は無事に成長していき、赤坂の水川の地(赤坂六丁目)に居を構えた。現在、その場所には「邸跡」の木標が立っている。龍馬が海舟を斬りに行って、逆に説得されて弟子になったのもこの場所である。また海舟は水川の地を相当気に入つたらしく、維新後も再び水川に住み、この地で臨終まで過ごした。

終焉の地には立派な石碑が建てられている。海舟の愛した「最中」を持って洗足池のお墓参りに

所変わつて文京区の本郷。ここに「壺屋総本店」という海舟が愛した最中で知られる和菓子屋がある。創業は寛永年間というから、徳川將軍もまだ三代目・家光の頃であり老舗中の老舗である。それが現在まで続いているのには海舟が一役買つている。維新の際、多くの店が「長い間、徳川様のお世話になつていたので、から」と次々に店をたたんでいったのだが、海舟はこの壺屋は皆が喜ぶからそのまま続けてくれと頼んだという。おかげで現在までこの店は続いており、店内にはそれを示すかのように海舟の書が飾られている。

早速、その壺屋へ出向き最中を購入。食べてみるとこれが実に美味い。最中の皮がとけて、あんど混じり合う絶妙なバランスが最高である。しかもそれが海舟も食べた味かと思つとなおさら感慨深い。そこで、これを久しぶりに海舟に食べていただこうと思いつき、この最中を持って海舟のお墓参りに行くことにした。お墓の場所は大田区の洗足池。海舟は無血開城の談判に行く際に通りがかった洗足池の自然に感嘆し、この地に別邸を築いた。そして「富士を見ながら土に入りたい」との思いから生前よりこの別邸の背後に墓を造つていたのである。現在、洗足池公園内にある墓がこの墓である。そのすぐ横には西郷隆盛の留魂祠もある。これは先に西南戦争で戦死した西郷を偲んで海舟が葛飾薬師寺に建てたものを海舟の遺志でこの地に移したものであり、



【勝海舟夫妻の墓】洗足池公園内に夫婦仲良く? 並ぶ海舟夫妻墓。墓石のデザイン「海舟」の文字は徳川慶喜によるものだといわれている。



1【原田川の銅像】墨田区役所横の海舟像。隅田川沿いにあり、指さす先には海が続く。 2【江戸城無血開城の碑】田町の薩摩藩下屋敷があつた場所で、ここで西郷との談判が行われた。 3【海舟生誕の地】両国公園内の海舟生誕の地。 4【海舟邸跡】赤坂・氷川の家跡。龍馬が通つたのもこの場所。 5【海舟終焉の地】こちらが氷川にある海舟別邸跡。海舟終焉の地である。 6【氷川神社】海舟もよく通つた氷川神社。 7【能勢妙見堂】父・小吉が海舟の怪我回復の為に、けんか腰の神頼みをした妙見堂。墨田区本所にある。 8・9【壺屋総本店】文京区本郷の老舗和菓子店。海舟お薦めの最中の味は絶品。 10【洗足軒】洗足池にあつた海舟の別邸の古写真。自ら「洗足軒」と名付けた。 11【西郷隆盛留魂祠】海舟夫妻の墓のすぐ隣にある西郷隆盛留魂祠。海舟の遺志でこの場所に設置された。

KATSU KAISYU

江戸を戦火より守つた江戸っ子。プライベートでも豪快だった? その半生を歩く!

海舟と西郷の関係の深さを感じさせる。さて、いよいよお墓参り。海舟と奥さんの民子の墓が仲良く並んでいる。が、実は仲が良いともいえないのである。というのも海舟の妻・民子は生前、私が死んだら夫の墓には入りたくない。既に亡くなつている長男・小鹿と一緒に埋めてくれと遺言していたのである。この発言の裏には生前の散々な苦勞があつた事が想像できるが、その中でも最も大きかつたのが妻の問題。海舟は実に多くの妻を持ち、それぞれに子供を産ませていた。この辺り、幼児期に犬に噛まれた怪我は影響なかつたのだと一安心だが、民子にすればそんな事を言つていない場合ではない。海舟はこの妻、それも三人と、その子供らを民子と一緒に同居させ、生活していたのだ。その民子の密かな我慢が先の遺言になつたのである。実際に当初、民子は長男の眠る青山墓地に埋葬された。その後、現在のように合祀されて二人仲良く並んでいる形となつたわけだ。

はたして民子は、もう海舟を許したのだろうか。きっとまだ怒ってるんだろうなあ、などと考えながら、お供えの最中をもう一つ追加して、その場を後にした。



【勝海舟 胸像】能勢妙見堂にある海舟の胸像。海舟の最期の言葉は「コレデオシマイ」の一言であつたという。激動の幕末から明治を生きた海舟の最期にふさわしく、実に勝海舟らしい言葉である。